

□ 書評 □

吉尾雅春(責任編集)

理学療法 MOOK 脳損傷の理学療法

- ① 超早期から急性期のリハビリテーション
- ② 回復期から維持期のリハビリテーション

山下隆昭

(兵庫県立総合リハビリテーションセンター)

教科書や書籍の良さは、まとまった知識と安定した情報を一定の期間を費やして提供できる点であるが、出版される頃にはやや鮮度に問題があることが危惧される。一方、月刊専門誌等のジャーナルでは、鮮度は良いが情報の統一性や拡がり不足することは否めない。この Book と Magazine の両方の利点を生かして編集されたものが MOOK である。すでに他の臨床医学分野では着実な実績をあげ多数の読者の支持を得ており、我々も愛読することが多い。

この度、三輪書店より理学療法分野における最新情報をテーマ別に提供することを目的に「理学療法 MOOK」シリーズが年 4 回刊の予定で始まった。

この記念すべき創刊号が札幌医科大学保健医療学部の吉尾雅春氏責任編集による本書である。理学療法士が日常の臨床場面で取扱う頻度の一番高い脳損傷をシリーズの初めに企画されたのは時宜を得たものである。テーマが大きいため、創刊 1 号、2 号を脳損傷の特集とし同時に発刊されたことも特筆すべきことである。

1 号では脳損傷の理学療法 ① として超早期から急性期におけるアプローチが網羅されている。第 1 章では脳血管障害とその診断についての医学的最新情報が

得られる。第 2 章では最近特に重視されているベッドサイドの理学療法の実践が述べられている。第 3 章では、急性期の運動療法の進め方について随意運動の促進、早期歩行訓練、高次神経機能障害、肩の痛みなどについて言及している。第 4 章・低酸素脳症、第 5 章・急性脳外傷に対する各々の理学療法など我々が平素の臨床上難渋している問題について示唆を与えられるものとなっている。

2 号は、脳損傷の理学療法 ② で、1 号より引き続いて回復期から維持期のアプローチが網羅されている。本号では従来より我々理学療法士が最もよく関わってきた時期や場面について新しい考え方の導入が随所に見られ非常に興味深い内容となっている。第 1 章・運動障害と理学療法モデルでは、運動制御および運動学習理論、姿勢調整などの解説がなされている。第 2 章は片麻痺の評価と動作分析、第 3 章・理学療法の実践として荷重連鎖、認知運動療法、非麻痺側へのアプローチ、体力作り、目標指向的・積極的リハビリプログラム、上肢へのアプローチ、摂食・嚥下障害等へのアプローチなど新しい知見を満載している。第 4 章は最終的なゴールである生活の問題が述べてあり、理学療法のまとめとして尚一層ふさわしいものとなっている。

全体を通し、各項目毎に Key Questions として最初に問題点が数題提起されており、それに対して各分野の第一人者が答える型で解説が加えられているので理解しやすいスタイルとなっている。脳損傷を扱う多くの理学療法士必携の書の 1 つとなるものと思われる。

① B5 180 頁、定価(本体 3,300 円+税)、〒 310

② B5 172 頁、定価(本体 3,300 円+税)、〒 310

三輪書店・刊、1998